

薬草

屋久島の亜熱帯土壌には薬草が繁茂しているため、この島には「薬の島」という名前がつけられました。（ヤクは日本語で薬を表す言葉の同音異義語です。）

屋久島では、江戸時代（1603-1867）の文書、*楠川文書*にも記録されているように、昔からウコンの一種であるガジュツ（*Curcuma zedoaria*）が栽培されてきました。ガジュツの根は胃腸障害のために服用される植物薬の一種、恵命我神散に使われており、楠川の工場で製造され、日本全国に出荷されています。この工場では薬の製造工程を紹介する 30 分から 50 分のツアーを提供しています。

薬草はまた、島民の毎日の食生活の大きな一部でもあります。サルトリイバラ（*Smilax china*）の葉に包まれたよもぎ味の団子、*かからん*団子は、屋久島で人気のおやつです。*かからん*とはこの葉のことを指す地元の言葉ですが、病気に「かからない」という日本語の言葉遊びから、地元の人々はこれを食べれば医者近づけさせないと言います。その他、屋久島で食されている薬用植物には、スイゼンジナ（*Gynura crepioides*）、ボタンボウフウの一種でみそ汁に加えられるボタンボウフウ（*Peucedanum japonicum* Thunb. var. *japonicum*）、そしてお茶に加えるのに人気のゲットウ（*Alpinia zerumbet*）などがあります。